

館山支部だより Vol.106



秋桜とも呼ばれるコスモス
＜9月中旬 杜宅の庭先にて＞

昨年来猛威を振り続けてきたコロナ禍ですが、ワクチンの接種も進み、このところ毎日の新たな感染者も減少傾向で明るい見通しすらありますが、一方では次のリバウンドに対する警告も真剣味を帯びております。長い間小康を保ってきた館山も、この7月以降新規感染者の増大とともにごく身近な所でのクラスターも発生しております。「現在が正念場」をモットーに、実効ある感染防止対策に力を入れて行くではありませんか。 <川村 記>

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230

支部の活動概要

《8・9月活動実績》

- (9～10月)館山航空基地開隊68周年記念行事
(コロナの感染拡大防止の観点から中止・自粛)
- 9..25(土) 9月支部役員会別法(コミセン駐車場)

《10・11月活動予定》

- 10..2(土) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉)
- 10.10(日) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 11月下旬 館山航空基地殉職隊員慰霊祭(細部未定)
- 11.27(土) 11月支部役員会(コミセン)

「館山支部の会則」はどうなっているの？

会員の皆さんの中には、館山支部には「会則(名称、呼び方は別として)」があるの、という疑問を持っておられる方も少なくないと思います。これに対する答えは「(正式なものはまだ)ありません」ということとなりますが、千葉県隊友会規約(第49条)では、支部規則(会則)の制定は義務付けられておらず、「支部長は理事会の議決により”必要な事項”を定めることができる」と規定されております。

支部創設(平成元年)以来「県規約の準用」で済ませてきましたが、支部の運営を担う役員(理事役)にとって支部活動の計画・実施面での「抛り所(指針・手引き)」となるべきものが、との判断に立って平成23年4月(2011年)に館山支部として理事会の議決でもって「支部運営規準」を定めた経緯です。

会則とせず「運営規準」としたのは、実践(試行)を経て時機を見て「会則」として制定するという事で現在に至っておりますが、現時点でこれを早急に会則として制定することは考えておりません。「会員の半数以上が参加する総会」にせよ草案からすべて「書面審議」で処理すること、いずれも非現実的であり、現行の運営規準の整備(充実)に力を入れるほうがより現実的と考えております。 <支部長>

千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕 10/2(土)千葉市

毎年春と秋に行われる千葉県護国神社の例大祭における奉仕作業のひとつとして千葉県隊友会では近隣支部から有志を募って清掃奉仕を続け、館山支部も支部を代表する意味でここ10年参加しております。

境内の「ああ特攻勇士之像」は、平成23年に寄付金を募って建立されたものですが、館山支部からも何名かの会員が趣旨に賛同していただいております。毎回、担当の県理事役の計らいで館山支部が特攻勇士之像の清掃を担当する恩恵に浴しておりますが、顕彰碑に刻まれた206名の特攻戦死者名(千葉県出身)とともに「あなた方のことを私たちは決して忘れません」の碑文を目にする都度、目頭が熱くなる一方で、現代の人々が特攻のことをどこまで認識しているのかを考えると、胸中複雑な感懐が交錯してならないのです。

なお、現在の護国神社(昭和42年建立)は、社屋の老朽化とともに非耐震構造のため、来年度からの諸行事は、目下工事が進められている新しい神社(若葉区)で催行される予定で、この場所での清掃奉仕も今回が最後となります。 <川村 記>

レクイエム

- 7/10 河部博安会員(享年85歳) ご逝去(8月に連絡を受け欠礼のほどお詫び致します)
- 8/13 原 稔郎会員(享年84歳) ご逝去
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします <支部会員一同>



<中国大陸南岸の海南島>

雑感：人生84年・各地で目の当たりにした台風の惨状

先週、房総沖を通過して温帯性低気圧となって消滅した台風14号は、9月の台風としては珍しく東支那海で”数日間”停滞した後、突如、進路を変えて西日本から紀伊半島を通過して関東方面に至るとい、連休中の日本列島を縦断するコースをとっています。東支那海から長崎県を通らず直接福岡県に上陸するという、気象庁の観測史上初めてと言われる極めてまれな進路をとっていますが、最近の台風は同じ場所に長いこと滞ることができるホバリング機能も備えているのでしょうか！

終戦直後の昭和22年、小学校4年生のとき、父親の仕事の関係で九州の別府に移転することになりました。熱海に次ぐ温泉地として有名です。青森から九州まで乗り継ぎはもちろん、四泊五日の車中泊・駅のベンチ泊という、何しろ普通乗車券を入手することすら困難な時代でした。別府で最も記憶に残っていることは、生れて初めて台風を”体験”したことです。幼児期から少年時代を過ごした青森の片田舎では台風を経験した記憶がまったく無かったのです。台風に対する危機意識がほとんど無かったと言うほうが適当かもしれません。

別府で最初に体験した「デラ台風」は今でも鮮やかに印象に残っています。米軍機がフィリピン沖で発見したということで、気象観測も米軍が主導していた時代のこと、台風にはなぜか「アイオン、カサリーン」といった女性の名前が付けられたのです。あなどるとコワイからでしょうか？幸い別府での台風被害の記憶はありませんが、青森で高校3年の時、おびたしい数の犠牲者を出した青函連絡船「洞爺丸転覆事故」は、ごく身近な場所で起こった大惨事として生涯脳裏から離れません。台風が少ないとは言え、これこそ台風が関係した激甚災害でした。

海上自衛隊に入隊した翌年(昭和34年)、行方不明者を含め5千名以上の犠牲者を数えた伊勢湾台風も稀に見る激甚災害だったと思います。休暇を取って名古屋市内に住む親戚の安否を尋ねたことがありました。市内の低地帯は至る所高潮で床上浸水の被害を被ったと言われ、すでに半年以上経っていましたが訪ねた親戚の家屋周辺一帯はまだ水が引かず、道路から玄関まで流木や廃材を利用した手づくりの橋で出入りするという水上生活者のような佇(たたず)まいで家族四人が元気に過ごしている様子に安堵させられました。

定年退職後に就職した損保会社のリスク調査の仕事で台風直後の鹿児島を訪れた際、鹿児島市から十数キロ先の東支那海側にある川内(かわうち)の顧客の工場まで車で向かいましたが、幹線道路は至る所で寸断され迂回中にさしかかった川の中州に、なんと大きな屋敷が丸ごと鎮座しているのには心底驚かされました。増水氾濫で川岸から土台ごと流されたもののようです。

顧客の工場は、海岸から切り立った高さ100mほどの断崖絶壁頂部のかなり急勾配の法面(のり面)を削って道路と工場棟が造られていましたが、最初に度肝を抜かれたのは、おびたしい数の馬や牛の亡骸が小山のように積み重ねられあちこちに置かれている異様な光景でした。台風で犠牲になった家畜や牧場の牛馬などが各地から持ち込まれたとのことで、改めて台風のすさまじさを実感させられた次第です。さらにこれらをクレーンで吊上げ、大きなコンクリミキサーに投入して細断し、次の工程に移すということですが以下のことは省略します。訪れた顧客は家畜用の飼料とか農業用の肥料を加工製造する工場だったのです。調査中、つきまとわれた異臭(腐敗臭)には正直閉口させられましたが先方様は大切な顧客であり、(必死の思いで)平静を装うことに努めたことすらありません。

地球の温暖化、台風の大型・巨大化が叫ばれて久しいですが、諸悪の根源が人間様にあることは間違いないのです。温暖化防止のための努力を加速するとともに、台風の発生段階で中心めがけて航空機で上空から保冷剤？などのミストを散布するなど、突飛なアイデアの試行も進めるべきではないでしょうか。 <<匿名希望(海)>>

海南島(中国)に散った館空艦上攻撃機隊

海南島とは中国の南岸にある島で、面積は九州と同じくらいで結構大きい島である。現在では「中国のハワイ」と呼ばれるほど飛躍的な経済発展を遂げている。一方で海南島・三亚に中国海軍は軍港や原子力潜水艦格納用の地下基地を設け、南支那海ににらみを利かしている。時代を日中戦争の頃にさかのぼり、海軍は海南島を占領し(1939年)、三亚ほかには航空基地を設け南方海上交通路帯の防衛に備えた。

海上護衛総隊の発足と館空の任務の変遷～館空解隊へ

昭和5年の開隊以降、館山航空隊(「館空」)は、横須賀鎮守府(現在の横須賀地方総監部に相当)の隷下部隊として艦載機搭乗員の養成とともに主として関東沿岸海域の対潜哨戒任務に従事していた。昭和18年12月に海上護衛総隊の発足により第901航空隊(「901空」)が編成され、艦艇と航空機が一体になった空水共同の海上交通保護作戦が行われるようになった。

901空は司令部を館山に置いて館空、大村空などの内戦航空隊(9個航空隊)がその指揮下に編入された。必然的に館空の任務、行動範囲も関東から紀伊半島方面へと拡大、延伸された。昭和19年12月、海上護衛総隊航空部隊の先任部隊として903空が編成され、館山に司令部が置かれた。館空及びほかの航空隊は「解隊」されて903空の指揮下に編入されたが、館空の艦上攻撃機隊だけはそのまま901空(この時期、司令部を朝鮮半島南岸の鎮海に移す)の指揮下で作戦に従事することになった。

12月中旬、901空は指揮下の(元)館空艦上攻撃機全機を海南島(中国)の三亚基地(図参照)に進出させ、海上交通路の保護作戦に当たらせているが、これ以降の作戦の経過、戦闘状況に関する記録資料はほとんど見当たらない。

館空の再編と艦上攻撃機隊の消息を辿る

昭和20年に入ると米潜の活動が次第に日本海、北海道東岸方面に移り、903空は司令部を大湊に移して以後の作戦を継続した。20. 5月、903空司令部から出された機密電では、

- (19年12月に解隊した)館空ほかの航空隊を再編する(5. 15日付)
- 館空の艦上攻撃機については、(なぜか)浜島基地(紀伊半島)在籍の機体を充当する・・・となっている。

水上偵察機隊を率いて紀伊水道方面の船団護衛作戦に従事する元館空司令は、再編された館空に水偵機とともに原隊復帰している一方で、901空指揮下で海南島に派遣されていた艦上攻撃機隊については、戦況とともにその消息を知る由もない。

海上護衛総隊の断片的な戦闘記録から、中国の成都をはじめとする基地から出撃した圧倒的に優勢な連合軍(主として米空軍)の頻繁な攻撃を受け、旧式兵器に加えて戦闘機を持たない護衛総隊として壊滅的な被害を受けた様子をうかがうことができる。このような状況下で、館空の艦上攻撃機隊は幾度かの海上戦闘、空襲を経て武運つたなく全滅したことも否定できない。

前大戦中、兵力の増援・補給支援も得られず、指揮・通信も途絶え、劣悪な状況下で戦場の露となり、戦史に記されることもなく、人知れず散華したケースはおびたしい数に上ると思う。戦没者の「慰霊顕彰」を考えると、複雑な思いを禁じ得ない。

<<自称地域史探索マニア その31>>